

明暗評釈 六

補遺(第二章)、第三章、第六章

鳥井正晴

補遺

第二章

③「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう変わるかわからない。そうして其変る所を己は見たのだ」
(三)、③、小島信夫の、△「明暗」、その再読▽〔漱石を読む〕所収、福武書店、平成五年(一九九三年)一月に、次の指摘がある。

△新聞小説の二回分の分量としては、当時の読者だけではなく、七十三年後の読者にとっても、負担が重すぎるほどである。翌日になって第二回めを読むものは、一回分までを手もとに置いてふりかえらざるを得ないほどである。そして読者によつては、第二回分までを読んだあと、ずっと翌日の新聞がくるまで、何か考えつづけるようなことが起ったともいえる。(P.17)△

⑩「偶然? ポアンカレの所謂複雑の極致? 何だか解らない」

第二章、津田は、根源的な「命題」の前に、連れ出される。しかし、「問」は、解けない。

(一)、①、第百十四章に、次の如く、ある。

△此所へ来てから、日毎に繰り返される彼等の所作は単調であつた。しかし勤勉であつた。それが果して何を意味してゐるか津田には解らなかつた。▽

②、第百八十三章にも、次の如く、ある。

△それ迄彼女が其所で何をしてゐたのか、津田には一向解せなかつた。又何のために彼女がわざ／＼其所へ出てゐたのか、それも彼には通じなかつた。▽

(二)、同様に、お延も、「命題」の前に、連れ出されている。第七十八章に、次の如く、ある。

△先刻電車の中で、ちら／＼眼先に付き出した色々の影は、みんな此一点に向つて集注するのだといふ事を、前後両様の比較から発見した彼女は、やつと自分を苦しめる不安の大根に辿り付いた。けれども其大根の正体は何うしても分らなかつた。勢ひ彼女は問題を未来に繰り越さなければならなかつた。▽

かくして、津田・お延ともに、「命題」の前に、据付けられている。

しかし、「問」は、解けない。解けない「気掛りな宿題」(第七十七章)として、津田とお延の前に、残り続ける。「考える人」、津田・お延をして、「解らない」ものとして、心の裡で、鳴り響いている。

補遺

第三章

初出

大正五年（一九一六年）五月二十八日・「東京朝日新聞」。
大正五年（一九一六年）五月二十七日・「大阪朝日新聞」。

評釈

①「角を曲つて細い小路へ遣入つた時、津田はわが門前に立つてゐる細君の姿を認めた。其細君は此方を見てゐた。然し津田の影が曲り角から出るや否や、すぐ正面の方へ向き直つた。そうして白い織い手を額の所へ翳す様にあてがつて何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍へ寄つて来る迄其態度を改めなかつた。」

（一）、小説の後半部、温泉場の第一日目、津田は、清子と、突然に出会ふ（第百七十六章）。「洗面所と向ひ合せに付けられた階子段」（第百七十五章）の、階下（津田）と、階上（清子）とでの、突然の再会で、それはあつた。

そして、再会を称して、しかし、清子は、翌日、次のよう（第百八十六章）に、云う。

△理由は何でもないので。たゞ貴方はさういふ事をなさる方なのよ」

「待伏せをですか」

「えゝ」

「馬鹿にしちや不可せん」

「でも私の見た貴方はさういふ方なんだから仕方がないわ。嘘でも偽りでもないんですもの」

「成程」

津田は腕を拱いて下を向いた。▽

津田の人間性が——「待伏せ」などをするという——津田の性質性が、清子によって、鋭く摘出されている。

そして、この性質性は、津田だけの専売特許ではない。第三章、見るように、お延も、明らかに津田を「待つて」いた。津田とお延の、質を同じくするところの、精神の構造である。

第四章

初出

大正五年（一九一六年）五月二十九日・「東京朝日新聞」。

大正五年（一九一六年）五月二十八日・「大阪朝日新聞」。

評釈

①「細君は色の白い女であつた。」

(一)、「新しい女」の典型・美禰子を、造形してヒロインとする、『三四郎』（明治四十一年）の冒頭も、次のように、始まる。

△女とは京都からの相乗である。乗つた時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移つて、段々京大阪へ近付いてくるうちに、女の色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じて

ゐた。それで此女が車室に這入つて来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。此女の色は實際九州色であつた。▽

②「けれども其一重瞼の中に輝やく瞳子は漆黒であつた。だから非常に能く働いた。或時は専横と云つてもいい、位に表情を恣まゝにした。津田は我知らず此小さい眼から出る光に牽き付けられる事があつた。さうして又突然何の原因もなしに其光から跳ね返される事もないではなかつた。

彼が不図眼を上げて細君を見た時、彼は刹那的に彼女の眼に宿る一種の怪しい力を感じた。それは今迄彼女の口にしつゝあつた甘い言葉とは全く釣り合はない妙な輝やきであつた。相手の言葉に対して返事をしやうとした彼の心の作用が此眼付の為に一寸遮断された。すると彼女はすぐ美しい歯を出して微笑した。同時に眼の表情が述方もなく消えた。」

読者の前に、主人公・お延は、まず、右のように、紹介される。お延を紹介するに、作者は殊更に、「眼」の動きを特筆する。

(一)、藤井淑禎の、△あかり革命下の『明暗』▽（『漱石作品論集成』第十二巻・明暗』所収、桜楓社、平成三年（一九九一年）十二月）に、次の指摘がある。

△「瞳と眉の演技者」お延と「顔色研究家」津田をめぐる明と暗のドラマ『明暗』（大5）が構築されることになるのである。

『明暗』ほど表情のクローズ・アップが多く、かつそれが重要な意味を担わされている作品も珍しいのではないか。それにしても、お延の頻繁な眉の動かし方は尋常ではない。「細君は濃い恰好の好い眉を心持寄せて夫を見た」△▽・「お延は何にも答へずに下を向いた。さうして何時もする通り黒い眉をぴくりと動かして見せた。彼女に特異な此所

作は時として変に津田の心を唆かすと共に、時として妙に彼の氣持を悪くさせた」△六▽・「彼女の眉がさもく厭さうに動いた」△四十四▽等々。心の動きと眉の動きとが連動していることは見易いところだが、同じことが瞳の動かし方についてもいえる。

惜しい事に彼女の眼は細過ぎた。御負に愛嬌のない一重瞼であつた。けれども其一重瞼の中に輝やく瞳子は漆黑であつた。だから非常に能く働らいた。或時は専横と云つてもいゝ位に表情を恣まゝにした。津田は我知らず此小さい眼から出る光に牽き付けられる事があつた。さうして又突然何の原因もなしに其光から跳ね返される事もないではなかつた。△四▽

もちろんお延がこのように設定されている以上、津田がたとえば近視であつたり鈍感な人物であつたりしてはだいなしだが、その辺は作者も抜かりはなく、「彼女の眼に宿る一種の怪しい力」に「彼の心の作用が（中略）一寸遮断された」（同前）りする場面を頻繁に挿入している。というより、津田は「談話の途中でよく拘泥」ると「何処迄も話の根を掘ちつて、相手の本意を突き留めやうと」するか、それができない場合は「黙つて相手の顔色丈を注視」して、吉川夫人から「一体貴方はあんまり研究家だから駄目ね」△十一▽とたしなめられるような顔色鑑定家として設定されているのだ。（P.375）△

「心」・「精神」の在り様と、直截運動するところ「眼」の表情が、故に、お延を紹介するに、第一義に置かれるために、「明暗」は、お延の「容姿」への描写は、少ない。

第五章

初出

大正五年（一九一六年）五月 三十日・「東京朝日新聞」。
大正五年（一九一六年）五月二十九日・「大阪朝日新聞」。

評釈

①「彼の机の上には比較的大きな洋書が一冊載せてあつた。」

（一）、第三十九章に、次の如く、ある。

△そのうちで一番重くて嵩張つた大きな洋書を取り出した時、彼はお延に云つた。

「是は置いて行くよ」

「さう、でも何時でも机の上に乗つてゐて、枝折が挟んであるから、お読みになるのかと思つて入れといたのよ」

津田は何にも云はずに、二ヶ月以上もかゝつて未だ読み切れない経済学の独逸書を重さうに畳の上に置いた。

「寐てゐて読むにや重くつて駄目だよ」

斯う云つた津田は、それが此大部の書物を残して行く正当の理由であると知りながら、余り好い心持がしなかつた

「さう、本は何れが要るんだか妾分らないから、貴方自分でお好きなのを択つて頂戴」

津田は二階から軽い小説を二三冊持つて来て、経済書の代りに鞆の中へ詰め込んだ。▽

津田の、現在、読書中の書物は、「比較的大きな洋書」である。しかも、それは、「経済学の独逸書」である。

越智治雄の、△明暗のかなた▽（『漱石私論』所収、角川書店、昭和四十六年（一九七一年）六月）に、次の指摘が、

ある。

△健三の場合には書斎という自身のみの場所が保証されていたのに対し、津田におけるドイツ語の原書はそういった性質のものではない。(P.357)△

漱石作品の、以前の、主人公達が、特殊な環境の人・いわゆる「高等遊民」であつたのに対して、『明暗』の主人公・津田は、そうではない。津田は、いまふう云う、サラリーマンである。

にもかかわらず、津田は、「寐る前の一時間か二時間を机に向つて過ぐす習慣になつてゐた」(第五章)、「彼は平生から世間へ出る多くの人が、出るとすぐ書物に遠ざかつて仕舞ふのを、左も下らない愚物のやうに細君の前で罵つてゐた。それを夫の口癖として聴かされた細君はまた彼を本当の勉強家として認めなければならぬ程比較的多くの時間が二階で費やされた」(第五章)、「今彼が自分の前に拵けてゐる書物から吸収しやうと力めてゐる知識は、彼の日々の業務上に必要なものではなかつた。それには余りに専門的で、又あまりに高尚過ぎた。学校の講義から得た知識ですら滅多に実際の役に立つた例のない今の勤め向きとは殆んど没交渉と云つても可い位のもの」(第五章)、である。過度に、知識人としての主人公が、『明暗』においても、なお、健在である。

(二) ①、第七十九章に、次の如く、ある。

△劃の多い四角な字の重なつてゐる書物は全く読めないのだと断つた。▽

②、第十五章に、次の如く、ある。

△西洋流のレターペーパーを使ひつけた彼は、机の抽斗からラエンダー色の紙と封筒とを取り出して、其紙の上へ万年筆で何心なく二三行書きかけた時、不図気がついた。▽

「四角な字」の読めない、「西洋流のレターペーパー」を使いつけている、きわめて西洋的な人物で、津田は、ある。

第六章

初出

大正五年（一九一六年）五月三十一日・「東京朝日新聞」。

大正五年（一九一六年）五月 三十日・「大阪朝日新聞」。

評釈

①「彼は襖越しに細君の名を呼びながら、すぐ唐紙を開けて茶の間の入口に立つた。すると長火鉢の傍に坐つてゐる彼女の前に、何時の間にか取り上げられた美しい帯と着物の色が忽ち彼の眼に映つた。」

（一）、①、第三十九章の、冒頭は、次の如く、始まる。

△あくる朝の津田は、顔も洗はない先から、昨夜寐る迄全く予想してゐなかつた不意の観物によつて驚ろかされた。彼の床を離れたのは九時頃であつた。彼は何時もの通り玄関を抜けて茶の間から勝手へ出ようとした。すると嬋娟に盛粧したお延が澄まして其所に坐つてゐた。▽

第三十九章、小説の、五日目・日曜日である。此の日、津田の「手術」が、行われる。と同時に、此の日は、お延の「芝居見物」の、日でもある。

②、第四十章に、次の如く、ある。

△看護婦は、何の造作もなく笑ひながら津田にお辞儀をしたが、傍に立つてゐるお延の姿を見ると、少し物々しさに打たれた氣味で、一体此孔雀は何処から入つて來たのだらうといふ顔付をした。▽

②「暗い玄關から急に明るい電燈の点いた室を覗いた彼の眼にそれが常よりも際立つて華麗に見えた時、彼は一寸立ち留まつて細君の顔と派出やかな模様とを等分に見較べた。」

(一)、第十二章の、冒頭は、次の如く、始まる。

△其時二人の頭の上に下つてゐる電燈がぱつと点いた。▽

(二)、第十三章の、冒頭も、次の如く、始まる。

△往來へ出た津田の足は次第に吉川の家を遠ざかつた。けれども彼の頭は彼の足程早く今迄居た応接間を離れる訳に行かなかつた。彼は比較的人通りの少ない宵闇の町を歩きながら、やはり明るい室内の光景をちら／＼見た。

冷たさうに燦つく肌合の七宝製の花瓶、其花瓶の滑らかな表面に流れる華麗な模様の色、卓上に運ばれた銀きせの丸盆、同じ色の角砂糖入と牛乳入、(中略) 三隅に金箔を置いた裝飾用のアルバム、――斯ういふものゝ強い刺戟が、既に明るい電燈の下を去つて、暗い戸外へ出た彼の眼の中を不秩序に往來した。▽

(三)、第十七章は、次の如く、終わる。

△奥へ入つた看護婦はすぐ又白い姿を暗い室の戸口に現はした。

「今丁度二階が空いて居りますから、何時でも御都合の宜しい時に何うぞ」

津田は逃れるやうに暗い室を出た。彼が急いで靴を穿いて、擦硝子張の大きな扉を内側へ引いた時、今迄眞暗に見えた控室にぱつと電燈が点いた。▽

(四)、第二十八章も、次の如く、終わる。

△薄暗くなつた室の中で、叔父の顔が一番薄暗く見えた。津田は立つて電燈のスイッチを換つた。▽

(五)、第四十五章に、次の如く、ある。

△彼女は暗闇を通り抜けて、急に明海へ出た人の様に眼を覚ました。▽

(六)、第五十七章に、次の如く、ある。

△下女は格子の音を聞いても出て来なかつた。茶の間には電燈が明るく輝やいてゐる丈で、鉄瓶さへ何時ものやうに快い音を立てなかつた。今朝見たと何の変わりもない室の中を、彼女は今朝と違つた眼で見廻した。▽

(七)、第百七十五章に、次の如く、ある。

△客が何処にゐるのかと怪しむどころではなく、人が何処にゐるのかと疑ひたくなる位であつた。其静かさのうちに電燈は限なく照り渡つた。けれども是はたゞ光る丈で、音もしなければ、動きもしなかつた。たゞ彼の眼の前にある水丈が動いた。渦らしい形を描いた。さうして其渦は伸びたり縮んだりした。▽

(八)、第百七十六章は、次の如く、終わる。

△「何うかしなければ不可い。何処迄蒼くなるか分らない」

津田は思ひ切つて声を掛けやうとした。すると其途端に清子の方が動いた。くるりと後を向いた彼女は止まらなかつた。津田を階下に残した儘、廊下を元へ引き返したと思ふと、今迄明らかに彼女を照らしてゐた二階の上り口の電燈がぱつと消えた。津田は暗闇の中で開けるらしい障子の音を又聴いた。同時に彼の気の付かなかつた、自分の立つてゐるすぐ傍の小さな部屋で呼鈴の返しの音がけたゞましく鳴つた。

やがて遠い廊下をぱた／＼馳けて来る足音が聴こえた。彼は其足音の主を途中で食ひ留めて、清子の用を聴きに行く下女から自分の室の在所を教へて貰つた。▽

見る様に、「電燈」と照応して、「明」と「暗」とのコントラストが、鮮やかである。

だからと云って、小説の題「明暗」と、電燈の「明と暗」とを、短絡的に結ぶべきではないが、登場人物達の「存在の世界」が、場として、印象的に、彫像され、点灯される。

ちなみに、Valdo・Vigilmo（ヴァルドー・ヴェリエルモ）による、『明暗』の翻訳名は、『Light and Darkness』（昭和四十六年（一九七一年）刊行）、である。

附記 一、『明暗』本文中、○印は鳥井。

一、『明暗』本文の引用は、岩波書店刊『漱石全集』第七巻・明暗』（昭和四十一年六月二十三日第二刷発行）（昭和五十年六月九日第二刷発行）に拠った。但し、旧字は、新字に改めた。

（平成八年十一月二日）